

【大連情報】

日本から距離が近い！ 日本語が話せる人材が多い！ 加速する日本企業の進出！

今なぜ、「大連」研修なのか
—「大連」という都市の魅力と基礎情報—

【大連情報の目次】

■大連の基礎情報

省／面積／人口／気候／長期滞在邦人数／経済成長／文化人

■大連の三つの魅力

- ①日本から距離が近く、アクセスに便利！
- ②日本語を話せる人材が多い！
- ③洗練された都市計画の中で、加速する日本企業の進出！

■大連の歴史

- ①「ダーリニ」近代化の軌跡
- ②ロシア、日本と大連
- ③近代アジアのロマンを体現する都市の玄関先「大連」

■女たちの満州

- 日本と中国の挟間に生きた女たち
—川島芳子・李香蘭・婉容—

■大連の基礎情報

●省：遼寧省における大連市

※中国は 32 の省から構成されている。
 ※大連市は、中国東北地方の遼寧省に位置する。

●面積：12,574 平方km

※広さは新潟県とほぼ同じ。

●人口：586.4 万人（2010 年現在・大連市戸籍）

※遼寧省では瀋陽に次ぐ規模の都市。

●気候：暖温帯大陸性モンスーン気候

※年平均気温は 10.5℃

※5 月の平均気温は、18.5℃

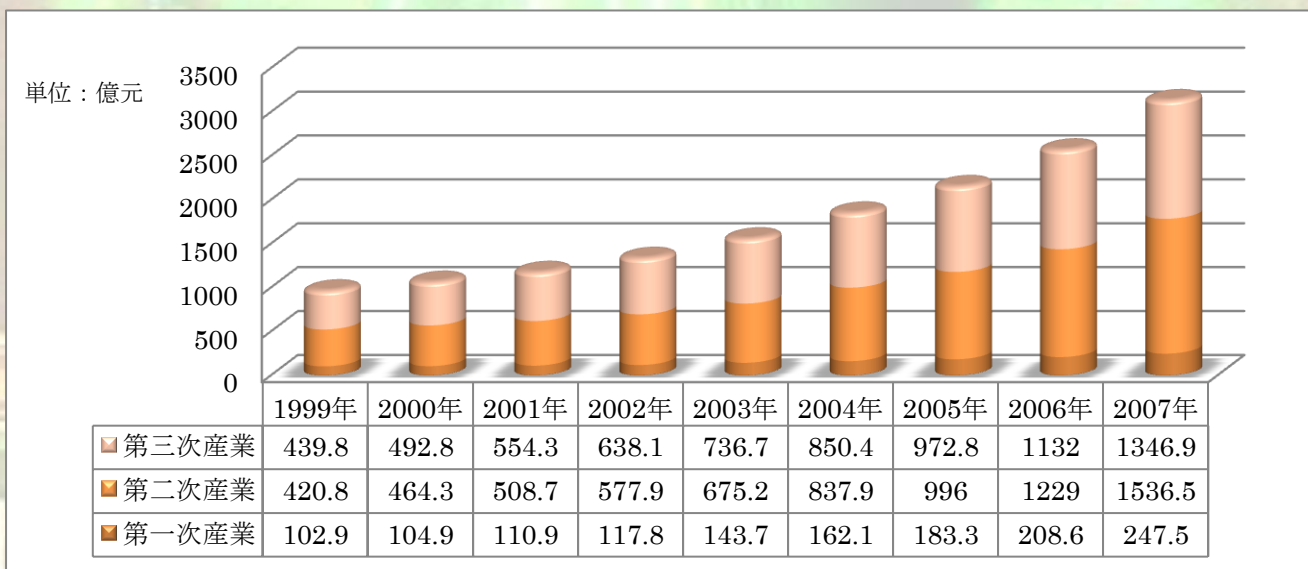
※5 月は大連の街路樹「アカシア」が咲き乱れ、一年のうちでももっとも美しい時期となる。

●時差：日本との時差は-1 時間。

日本の正午は、大連では午前 11 時になる。サマータイムはない。

●長期滞在邦人数：6,565 人(2011 年 6 月現在)

●経済：改革開放以来、大連市は一貫して高い経済成長を記録している。2007 年に大連の GDP は、3,000 億元を突破し、中国の「GDP 3,000 億元都市クラブ」への仲間入りを果たした。中国第三の経済として急成長が注目されている。(1 元=12 円 2012 年 1 月現在)



『中国大連市勢要覧』より(2008 年大連市人民政府発行)

●大連にゆかりのある日本の文化人：

山田洋次(映画監督) 清岡卓行(作家、詩人) 向坊隆(東大総長) 遠藤周作(作家)
 荒木とよひさ(作詞家)ら・・・

■大連の三つの魅力

①日本から距離が近く、アクセスに便利！

- 大連は、中国東北地方の、華北地方の玄関口。北東アジア(日本、韓国)の重要な物流拠点であり、鉄道、空港など移動手段が確保されている。
- 日本の各都市との間には、航空機の**定期便が週 87 便**(2008 年)が就航している。直行便は、東京、大阪、福岡、広島、名古屋、富山、仙台、札幌、岡山から出ている。
- 成田空港からは、**3 時間**のフライトで到着する。
- 大連周水子国際空港から市の中心部までは、わずか 10 km。空港から市内まではタクシーが便利であり、片道 25 円で乗車できる。



出典：大連市人民政府『中国大連 市勢要覧』2008 年

②日本語を話せる人材が多い！

- 日本と大連との歴史関係は古く、大連には日本語を話せる人材が多く中国の都市の中ではトップ。
- 大連には 23 の大学があり、大学生が 30 万人以上いる。ここで日本語教育を受ける学生数は多数。例えば、中国でも有数の大学として著名な大連外国語大学では、在校生 1 万 2,000 名のうち、約 7 割近い 8,000 名の学生が日本語を学んでいる。
- 大連は、日本語に対する関心が高く、**日本語教育の拠点**である。したがって、日本語コミュニケーションによるビジネスが可能である。



日本語人材を多く輩出している大連外国語大学

③洗練された都市計画の中で、加速する日本企業の進出！

- 1990年代、「北方香港」をスローガンにして大胆な都市建設に着手。
 - ・・・国連環境局「グローバル500賞」(2000年)を受賞！**世界の環境都市**として躍進。
 - ・・・中国国内から「人間事居住環境省」・「中国最優秀観光都市」に認定。
 - ・・・**「ロマンの都」**として都市ブランド化を推進！

●渤海経済圏として市場経済化に成功し、中国東北最大の大工業都市である。

●1990年代後半から、日本向けの送付と開発とBPO(ビジネス・プロセス・アウトソーシング)などの産業育成を開始。

●外国資本の受入政策として積極的展開をはかる。

・・・大連市内に設置された「外国人向け」の病院の充実。(4つの病院を設置)

・・・外国人のためのインターナショナルスクールや、日本人学校の設立。

●大連に進出する企業は、大中小含め**4,000社**弱。

年々その数は増え続けている。

北京、上海に次ぐ、開拓市場の一つとして注目を集めている。

●近代アジア、欧米文化が融合する都市大連の建築群は都市観光の一つの醍醐味！

シティバンク大連支店(旧大連民政署)

大連市中級人民法院(旧大連裁判所)

中国銀両遼寧視点(旧横浜正金銀行)

レトロ&モダンが融合する大連の都市建築

●**大連国際ファッション祭り**(服飾節)

1988年から毎年9月に開催。イベントの開催期間中、パレード、ファッションショー、輸出商談会、デザイン・コンテンツ、世界デザイナーのコレクションショー、国際ファッション文化フォーラム、博覧会などさまざまな催しが実施される。ファッション祭りにおける博覧会は、中国三大博覧会の一つといわれている。

●大連に進出している日本企業

[製造業]：マブチモーター、原田工業、キャノン、東芝、パナソニック、ゲンゼ、オムロン、TDK、日本電産、日清オイリオグループ、岩谷産業、三洋電機、太平洋セメント、コニカミノルタ、三菱電機、旭硝子、宝酒造、TOTO、YKK、LIXIL、ローム、他

[銀行]：三菱東京UFJ銀行、みずほ銀行、三井住友銀行、山口銀行、山陰合同銀行、オリックス銀行、他

[保険]：損保ジャパン、東京海上日動火災、三井住友海上火災、他

[商社]：伊藤忠商事、双日、三井物産、三菱商事、他

[運輸]：日本航空、全日本空輸、中部運輸、日本通運、日新、他

[ソフト・IT]：パナソニック、ソニー、アルパイン、SCSK、豊田通商電子、他



■大連の歴史—アジア・欧米の近代文化が融合する都市—

1898年	日清戦争後、ロシアが遼東半島を租借 その後、現在の大連市の原型となるダーリニ特別市を設ける
1905年	日露戦争後、日本が遼東半島を租借 ダーリニ特別市を大連市とし、軍政処(後の関東州総督府)を設置
1945年	共産党の指導のもと「大連市」人民政府樹立
1950年	「旅大市」人民政府樹立
1981年	「旅大市」から「大連市」と改称

①「ダーリニ」近代化の軌跡

大連は中国大陸の遼東半島の突端に位置し、近年、著しい経済発展を遂げていることで注目されている大都市です。

その歴史は、中国大陸における王朝史とともにありながら、朝鮮、蒙古、ロシア、日本との交流からも語ることができます。

大連という名前は、近代になってロシアがつけた名前に由来しています。

欧米列強の近代化の波に巻き込まれたアジアは、19世紀後半から、欧米の進出に見舞われました。中国の遼東半島に最初に進出したのは、ロシアです。ロシアは1898年、遼東半島の「租借権」を得て、ここに都市の建設をはじめます。このとき、ロシアが遼東半島の突端にある地域を、「遠いところ」(ダーリニ)と呼んでいました。ロシアから見れば、1,000キロ以上も中国東北部を南下した遼東半島は、まさに「はるか彼方の異郷の地」だったのかもしれませんが。このときの「ダーリニ」という呼び方が、転じて「大連(だいいん)」といわれるようになりました。


②ロシア、日本と遼東半島

1905年以降は、ロシアに代わって日本の統治になりました。日露戦争に勝利した日本が、遼東半島の「租借権」を得たのです。

日露戦争に勝利した戦いとして有名なのは、東郷平八郎が率いた日本海軍による「日本海海戦」です。当時、世界最強といわれたロシアのバルチック艦隊を破り、日本に勝利をもたらしました。実は、この「日本海海戦」での勝利は、その前哨戦ともなる遼東半島におけるロシアと日本の陸軍の戦いの結果もたらされたものでした。乃木希典の指揮のもと旅順における二〇三高地を日本が占拠したことによって、旅順港に停泊していたロシアの艦隊を、その高地から撃沈させることができたのです。日本人兵士だけでも二万人の犠牲者を出したといわれていますが、この戦いは、まさにアジアにおける日本の近代化の一つの転機となったのです。

③近代アジアのロマンを体現する都市の玄関先「大連」

遼東半島を「租借地」とした日本は、その後この地域を足掛かりとして、アジア大陸への進出にまい



進していきます。時代は、大正から昭和へと入り、日本は自国の領土を拡大するために、軍事力による統治展開をはかっていくようになりました。

そうした時代の趨勢において、1932年、中国東北部の地域に「満州国」が建国されます。満州国の皇帝は、中国・清朝最後の皇帝となった溥儀でしたが、この国の意思決定には、日本の官僚、軍人が多く関わり、その行方を左右することになりました。そのため、1945年、日本の敗戦とともに「満州国」も崩壊してしまいました。わずか13年のあつという間の短い出来事でした。

「満州国建国」については、歴史認識の観点からいえば、反省されるべき点多々あります。歴史が語る資料、人びとの記憶、伝承は、その「跡」を物語っており、それらから目をそむけることはできないでしょう。こうした歴史への視座を担保しつつも、「満州国」は、「内地」での志に破れ、心機一転、一旗をあげようとする人びとが集まっていた場所であったこともまた記憶にとどめておく必要があるかもしれません。

「満州国」の首都であった「新京」—現在の長春—は、人口約24万人の大都市でした。ここでは、近代の都市建築の思想と技術を結集した都市計画が進められています。電線は地中に埋められ、官庁役所の建物は御影石による建築、花壇や噴水によって区画整理された西欧式の公園、ゴルフ場、百貨店、大学などが建てられました。こうした近代化を達成しようとする満州国の玄関先に「大連」は位置づけられています。遼東半島突端の大連付近は日本の「租借地」という位置づけであり、「満州国」へ接続するための重要な地域でした。大連は、日本から満州国へ渡る人びとが集まり、またその往来にともなってさまざまな物資が集積する場所だったのです。満州国を横断し、アジア大陸からヨーロッパへとつながっていく「南満州鉄道株式会社」の本社が建設されたのも「大連」です。また、大連市の中心には西洋様式の「ヤマトホテル」がそびえ立ち、屋上のルーフガーデンからは、大連の大広場を見渡すことができました。「ヤマトホテル」は大連のほか、旅順、奉天、長春などに設けられ、満鉄が経営する格式の高いホテルとして有名でした。ロシア、日本、中国の文化が融合する近代都市として戦前の大連は発展していました。

■女たちの満州

●日本と中国の挟間に生きた女たち—川島芳子・李香蘭・婉容—

先に「大連の歴史」において、遼東半島におけるロシア、日本の攻防、満州国の歴史を見てきましたが、近代の国家・政治・戦争など歴史の表舞台に顕れてくるのは、ほとんどが男性の官僚、軍人、民間人です。彼らが意思決定機関の中核に立って、国を動かしてきました。

そのような中、満州の地において、日中両国の挟間で翻弄されながらも生き抜いた三人の女性がいます。川島芳子、李香蘭、婉容です。

川島芳子と李香蘭は、「五族協和」という満州国における民族の共生思想—実際は日本人による強圧統治になりましたが—の象徴的存在として捉えることができるかもしれません。

川島芳子という名前は日本名ですが、実は彼女は満州国皇帝となった溥儀と縁戚関係にある「愛新覚羅」一族に生まれた愛新覚羅顯玗という名前をもつ中国人でした。一方、李香蘭は、満鉄で中国語を教えていた父山口文雄と母アイとの間に生まれた「日本人」であり、日本名は山口淑子といひます。

川島芳子は中国人の両親から生まれながら日本人川島浪速の養女となったことで、日本で育ち、成人後は満州国で諜報活動を行っていた「男装の麗人」として知られています。愛新覚羅の一族から川島家の養女となった芳子は、17歳のとき自殺未遂を起こしています。

事件のあと、髪を短く切り、男装をするようになりましたが、この自殺未遂は、養父浪速に凌辱されたことがきっかけだったともいわれています。こうした過去を乗り越えるように、丹精な顔立ちで男装の姿は凛々しくも妖艶であった芳子は、愛新覚羅の出身ということもあってその後マスコミで騒がれ、人びとに広く知られるようになりました。やがて日本から満州へとわたっていた芳子は、結婚／離婚を経験したり、日本軍人との浮名を流しています。

李香蘭は、満州で育ったため日本語だけでなく中国語も堪能であったことから、満州映画協会から中国人の専属映画女優としてデビューします。この李香蘭が専属とな

った満州映画協会は、満州国の繁栄を体現する象徴的な映画会社です。この会社は、日本の元憲兵甘粕正彦が理事長を務めていました。満州は内地政府の意向と、現地を掌握する日本軍人が強い影響力を發揮していましたが、彼らとの癒着を深めた甘粕は、その人脈を駆使して事業を拡大していきました。満州国のプロパガンダとしての役割も担い、アジアにおける理想国家「王道楽土」としての満州をスクリーンで彩る重要な機関でした。

このような背景をもつ映画会社で、李香蘭は女優だけでなく歌手としても活躍していきます。彼女の動向は、満州国のみならず革命



李香蘭



川島芳子

の気運たちこめる中国、海を隔てた内地日本まで報じられ、日中双方の人びとから人気を得た女性でした。李香蘭は、敗戦後日本へ戻り、日本人「山口淑子」として女優、司会者、国会議員など幅広い分野で活躍しています。

そしてジェンダー・女性学の観点からみれば、婉容という女性の人生もまた興味深いものです。婉容は、溥儀の正室として満州国の皇后となった女性です。しかし、溥儀との仲がうまくいかなかった婉容は、形ばかりの皇后に据えられていました。新京にあった満州国皇帝の宮殿ではアヘン中毒に陥った彼女が、公の場に姿を現すことはほとんどなかったといわれています。さらに溥儀はそうした婉容との離婚も考えていたようで、満州国崩壊の際、溥儀たちが新京を脱出しようとしたとき、彼女は取り残され、最後は敗戦後の動乱の中、朝鮮の国境近くの監獄内で亡くなったといえます。

婉容と同じく、川島芳子も日本の敗戦によって命を落としています。満州国において日本側に有利となる諜報活動を行っていた芳子は、売国奴として処刑されました。しかしその死後も、彼女の人気が高かったことから、処刑から逃げ出し生き続けているという噂がたえませんでした。

怒濤の近代史の波の中、中国と日本の挟間にたたされた彼女たちは「女性だからこそ」の経験をもつ



左：婉容 右：溥儀

て、両国の間一すなわち満州一を生き抜いたといえるでしょう。諜報活動を行なって処刑台にたたされた川島芳子の軌跡は、もしかすると17歳のとき断髪にいたった経験が大きく影響しているかもしれません。婉容については、なぜアヘン中毒になったのかという観点を抜きにして語ることはできません。溥儀との政略結婚、妻妾同居の結婚生活、夫との不仲など、性の二重規範—性的自由を許された男性性の下に女性性が抑圧される—が、婉容をそのように追い込んでいったとも考えられます。アヘンに溺れるしかなかったのかもしれませんが、その行為は、むしろそうした男性中心の政治、文化に対する彼女なりの精一杯の抵抗だったのかもしれません。李香蘭についても想像力がめぐります。彼女は敗戦後生き抜いていますが、戦前、中国人女優として演じ続けなければならず、日本人であることを公表することを許されなかったその心境は、どのようなものであったのでしょうか。日本のプロパガンダ女優であるけれども、中国人としてそのメンタリティを保持しなければならないというのは、女性としての彼女の自己形成にどのような影響を与えたのでしょうか。

このように日本と中国の挟間にたたされた彼女たちの軌跡をめぐってみると、歴史の新たな一面が見てくるのではないのでしょうか。女性たちの生きた足跡というのは、政治の攻防や国家の対立の変遷に重きをおく歴史叙述の世界では、記録されにくいものです。しかし、男性たちが担った政治や戦争の“表舞台の後方”には、男性の数と同じだけの女性たちが“控えている”のであり、それだけの物語が紡がれていることに注意を向けることが大切でしょう。満州の歴史も、こうした観点から読み解くことによって、より豊かで広がった空間の中で捉えることができるのではないのでしょうか。またこうした歴史観の上に現在の中国東北部、大連があるということを忘れてはいけないのかもしれません。

★大連の歴史を知る手引き書

司馬遼太郎『坂の上の雲』(全8巻)文春文庫、1978年

川村湊『異郷の昭和文学：「満州」と近代日本』岩波新書、1990年

——.『満州鉄道まぼろし旅行』文春文庫、2002年

清岡卓行『アカシアの大連』講談社文庫、1973年

★参考資料

夏徳仁『大連振興の軌跡』中央公論新社、2011年

梁過『現代中国「解体」新書』講談社現代新書、2011年

荒木妃佐巳『中国ビジネスは大連を狙え!』アルマツト、2011年

大連市人民政府『中国大連 市勢要覧』、2008年

在瀋陽日本国総領事館大連出張駐在官事務所ホームページ

